

資料の繋がりを反映した文学館デジタルアーカイブの構築

関根 颯香

日本文学資料は古典から近代まで、長い時を越えて伝えられ、日々研究が進められている。その反面、日本近代文学資料は関東大震災や第二次世界大戦の影響により、多くの資料が消失・散逸し、保存、収集、展示を行うことが困難となっている。こうした現状から、散逸した日本近代文学資料を収集・保存する施設が必要とされ、文学館が設立された。しかし、文学館は多様な機能を持つために、存在意義や位置づけが不明瞭な状態となっており、どのような目的で活動を行っているのかという点に着目した研究が必要とされている。また、文学館は所蔵資料の特殊性や孤立したシステムといった問題から、デジタル化による利活用について議論が見られず、デジタルの流れに取り残された形となっている。

そこで本研究では、全国文学館協議会に所属している文学館の活動から文学館の現状とデジタル化における課題を整理し、関連する文学資料の横断的な検索や散逸した同一作家の資料を繋げ、各文学館同士の連携を築くことを目的とした。

まず、文学館のデジタル化の状況を把握するため、全国文学館協議会に所属している文学館の Web サイトを対象に、文学館の基本的な活動内容およびデータベースやデジタルアーカイブの構築状況などを調査した。その結果、現在のデータベースやデジタルアーカイブでは各館が持つ同一作家の文学資料を一律に把握することができず、作家同士の交友関係や文学的な思潮といった各館で保存される文学資料同士の繋がりを反映した調査や検索を行うことが困難な状態にあると判明した。

この問題を解決するため、現在のデジタル技術でどこまで資料の繋がりを実現できるか、実際にデジタルアーカイブを試作して確認することにした。試作したデジタルアーカイブでは、有島武郎を例として **Linked Open Data** を活用し、システムを構築した。作家の概要や思潮、交友関係などのデータは **Linked Open Data** である **DBpedia** から取得し、検索結果の画面に表示した。作家の資料を所蔵する文学館の情報は独自のデータベースを作成し、資料形態別に各館が所蔵する同一作家の資料を閲覧できるようにした。その結果、文学資料の横断的な検索や散逸した同一作家の資料を繋げることは比較的容易に実現できることがわかった。ただし、試作したデジタルアーカイブでは、作家名からしか検索できず、資料に関する詳細な情報を繋げたり、それらを効果的に閲覧したりする機能が不足している。

しかしながら、本研究によって、各文学館同士の連携を築く可能性は十分に示すことができたと考えており、これを本研究の結論とする。

引き続き日本近代文学資料をデジタル分野から利活用するための仕組みを検討し、文学館と文学資料同士を繋げるシステムの在り方を模索していきたい。

(指導教員 宇陀 則彦)